

社会科部会

研究主題 調べたことをもとに自分の見方や考え方を深め 表現する力を高める指導

1 主題について

昨年度のを引き継ぎつつ、さらに一步進んだ、見方や考え方を深めるための手立ての工夫、学習で獲得した思考の深まりを、効果的に表現する力を高めるための手立ての工夫に重点を置いて研究をすることにした。

2 今年度の取組

月 日	実践内容	月 日	実践内容
4月11日	第1回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	10月31日	第2回総合研究会 授業研究会（城西小学校）
9月19日	指導案検討会（城西小学校）		

※授業研の後、昨年度に引き続き五十嵐校長先生から「ふるさと再発見」（八郎太郎伝説パート2・泣きつ面山伝説・釈迦内唐糸姫伝説）と題し、伝説と現存物との関係を紐解く興味深い講話をしていただいた。

3 研究内容

(1) 授業研究

- ・期 日 平成25年10月31日（木）
- ・会 場 城西小学校
- ・単元名 4年「きょう土をひらく～田中橋のひみつをさぐる～」
- ・授業者 佐藤 健

① 授業者から

- ・ゲストティーチャー（以下 GT）が一人欠席となってしまう、本時は指導案と違う展開になった。予定通りであれば、GT に対するフリーのインタビュータイムを設けたり、キャッチフレーズの児童間交流をさせたりしたかった。
- ・4年生にとって「調べる」とは。資料が古い文献で文言が難しく、作り直しが必要であった。資料を読み取ることができても、気付きが生まれにくい。与え方に一考を要する。
- ・資料の読み取りをする際、教師の目指すところにたどり着けない児童に対しての支援が難しい。色々なグラフや表、写真、地図に触れさせ、気付きを引き出す活動を増やし、力を付けさせなければいけない。
- ・本時の目標と評価の整合性、そこに向かうための手立てが一致しているかどうか、自分自身悩んでいるところである。

② 協議（ワークショップから）

〈視点1〉

- 地域素材やゲストティーチャーの活用の仕方は、本時のねらいに迫る上で効果的であったか。
- ・GT との役割分担が計画的になされていた。また、活用の場面もよかった。
 - ・GT を活用することによって、教材と課題が児童にとってより身近になった。活用時間が少なかったという意見もあるが、本時のねらいを考えると妥当である。
 - ・GT の説明が詳しく丁寧でよかった。しかし話が長くなると、児童にとっては要点が分かりにくくなる。その点は綿密な打ち合わせでクリアするしかない。単元の中で GT 活用場

面の位置付けをどこにするかというのを考えてもよい。

〈視点2〉

課題解決的な学習における話し合い（言語活動の充実の工夫）は、自分の見方や考えを深めるために有効であったか。

- ・言語活動は思考・判断・表現力を育てるための手立てである。交流だけで終わらないよう、理由をもって話し合いに臨ませたい。



【GTからのアドバイス】

- ・前時までの振り返りが多く、話し合いの時間が少なくなってしまった。
- ・キャッチフレーズづくりはこれまでの学習の凝縮。根拠についての話し合いがほしかった。
- ・苦心・努力・人柄を知識としてつかむことができた。話し合いを深めるためには、理由付けをさせる、似ているものをつなげて発表させる、キーワードの文章量の目安を設ける、交流する場の工夫をするなどの手立ても考えられる。

(2) 指導助言（佐藤 政彦 指導主事）

- ・本単元のねらいは「地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考える」である。地域の発展に貢献した先人の強い信念、努力といったものが、当時の人々や私たちの生活の向上にどのように結び付いているかを捉えさせるのが大きなねらい。それをふまえて、児童に何を調べさせ、何を語らせるかを念頭に置くことで、深入りせずにもどの程度伝えたらよいかが見えてくる。
- ・社会科は資料を用いて解決していく学習である。人物を取り上げる学習では、身近であればあるほど教材化の資料探しが難しい。教員同士協力して資料を探し、まとめて全体の財産にすることもできる。それでも資料集めが困難な場合は、身近な地域からもう少し広げた例を扱ってもよい。県全体に広げることにも可能である。
- ・キャッチフレーズづくりは、教材や資料を理解していなければできない、とても知的な学習である。根拠となる資料を用意することが大前提である。
- ・GT を生かすためには、本時のねらいをはっきり伝えなければならない。本時ではコンパクトな説明と丁寧な指導で、とてもよく生かされていた。話を聞く際には、メモが必要かどうか、また、体の向きを指示するなどの配慮も必要。資料に関して、本時は担任やGTの話、板書など、情報過多の感もあった。
- ・キャッチフレーズについて、なぜそう考えたのか理由を発表させるのが本時の重要な活動。児童間の意見交流を通して自分の考えを再構築する場面が話し合いである。そうすることで言語活動が思考力につながっていく。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・GTの活用という生の資料に触れることで、児童にとって教材と課題が身近なものになった。活用の場面を吟味したり、綿密な打ち合わせをしたりすることによって、GTの活用がねらいに迫る上で有効な手段となる。地域素材を扱う難しさは、資料収集や作成にある。教材研究と資料収集がすばらしく、児童はより深く学習することができていた。

(2) 課題

- ・話し合いをさせる際には、理由付けが必要不可欠である。言語活動は、思考・判断・表現力を育てるための手立てとして位置づける必要がある。